

スウェーデンの基礎学校および高等学校における sex och samlevnad (性と人間関係) 授業実践事例の検討

佐藤 年 明

Analyses on Instructions on 'Sex och Samlevnad' (Sexuality and Personal Relationship) in a Swedish Groundschool and a Gymnasium

Toshiaki SATOU

要 旨

本稿は、日本教育方法学会第45回大会(2009年9月26-27日 香川大学教育学部)における筆者の同題の自由研究発表報告における配付資料に加筆修正を加えたものであり、筆者が日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)海外学術調査)の交付を受けて行なっている研究「共生社会における性教育の現代的意義—スウェーデンの先進的事例に学ぶ—」(課題番号19402048 2007-2009年度 以下「科研費第2期研究」と略記)における研究調査活動の総括・報告の一環を構成するものである。この調査研究では、それに先立つ2001-2004年度における科研費交付研究「スウェーデン王国における性教育の歴史と現在の課題」以来のスウェーデンにおける性教育実践者・研究者との交流の蓄積の上に立って、初めて基礎学校(grundskola)及び高等学校(gymnasium)における性に関する学習(sex och samlevnad = 性と人間関係、性と共生)のいくつかの授業を参観し、その一部を記録することができた。本稿では基礎学校であるDalarö skolaと高等学校であるBlackebergs gymnasiumの授業を分析している。

I. スウェーデンでの「性と人間関係」の授業の観察

スウェーデンでは1955年以来性教育は必修とされているが、具体的なプログラムは各学校に任されていて、内容も実施学年・時期も非常に多様である。そのため筆者が短期の現地滞在を重ねても、なかなか性に関する授業の参観機会を得られなかった。さらに、せっかく機会を得られても、保護者の同意を得られていないなどの理由でビデオカメラによる記録を残すことができない場合があった。

「科研費第2期研究」において実現した基礎学校・高等学校の「性と人間関係」授業参観は、下記の通りである。

2007年度

- 2008年2月11日 Alviksskolan 8年生クラス(15名)を参観。恋愛、セックス、避妊、同性愛、ポルノなどについての教師の質問に生徒達が自由に答えた。(親の同意がとれていないという理由でビデオ撮影は許可されなかった。)
- 2008年2月21日 Banslättsskolan 5年生クラス(13名)を参観。4歳・12歳・20歳の男女のからだ、性器、性交、受精と胎児の成長、出生について教師がスライドで説明し、子どもは自由に質問をした。(ビデオ撮影を断られ、今後事前に親の同意を得ることについても「微妙な問題なので依頼したくない」と断られた。)

2008年度

- ・2008年9月4日 Dalarö skola 7学年・9学年の男子グループ、女子グループの合計5つの授業を参観。それぞれ1時間前後の授業で、コンドームの装着練習、コンドームを使用した性交の手順、男子と女子の行動特徴や関心事、ポルノ、同性愛など多様な内容。1つの授業は数種類の短いエクササイズから構成されていた。

(参観者本人と通訳者以外は視聴しないという条件で、ビデオ撮影を許可された。)

- ・2009年2月20日 Blackebergs gymnasium 移民の生徒達(男子グループ)への入門的な性の学習を参観。

(ビデオ撮影は、授業担当者が事前に生徒に了承をとってくれたため許可された。)

本報告では、以上のうちビデオカメラによる記録をとることができた Dalarö skola 及び Blackebergs gymnasium の授業を分析する。但し、両授業の全記録は紙数が足りず掲載できない。しかし授業分析には全体の記録を参照することが必要であるので、本稿の基礎資料として下記のウェブ・ページを参照されたい。

Dalarö skola の授業記録：<http://www.cc.mie-u.ac.jp/~tsatou/20080904Dalaroskola.pdf>

Blackebergs gymnasium の授業記録：<http://www.cc.mie-u.ac.jp/~tsatou/20090220Blackebergs gymnasium.pdf>

II. Dalarö skola における sex och samlevnad の授業の分析^{*1}

II-1. 授業を構成するいくつかの活動

参観した各授業の構成は下記の通りである(詳細は上述の授業記録参照)。

① 7学年男子グループ1 7名 (35分間)

1. コンドーム装着練習(※1 18分)
2. コンドームを装着した性交の過程について20枚のカードを正しい順序に並べる(※2 15分)

② 7学年男子グループ2 11名 (54分間)

1. 川のジレンマ(※3 20分)
(物語を聞いて6人の登場人物をもっとも間違っているものから順に並べる)
2. 男の子と女の子の特徴3つをグループでリストアップする(11分)
3. 男の子と女の子の話題ベスト5をグループでリストアップする(※4 11分)
4. コンドームを装着した性交の過程について20枚のカードを正しい順序に並べる(※2 10分)

③ 9学年男子グループ 11名 (60分間)

1. コンドーム装着練習(※1 16分)
2. 愛とセックス(※5 29分)
(26の質問に対して、各自が緑=はい、赤=いいえ、黄=わからない、の3つのカードのいずれかを挙げる。)
3. ポルノ(※6 6分)

^{*1} この授業観察の速報を下記の拙稿に掲載した。授業者にも送付するために英文で作成した。

Toshiaki Satou, "Records and Analyses of 'sex och samlevnad' (sexuality and personal relationship) lessons in the seventh and ninth grade at Dalarö skola in Sweden", (スウェーデン王国ダーラレ基礎学校7学年及び9学年における「性と共生」の授業の記録と分析) 『三重大学教育学部研究紀要』第60巻(教育科学)2009年 pp. 253-267

（6つの質問の後、3つの質問に3色のカードを挙げて回答する。）

4. アルコール（7分）

（13の質問に3色のカードを挙げて回答する。）

④ 9学年女子グループ 26名（51分間）

1. 愛とセックス（※5 12分）

（25の質問に対して、各自が緑=はい、赤=いいえ、黄=わからない、の3つのカードのいずれかを挙げる。）

2. ジェンダー（9分）

（6つのグループに分かれて、典型的な男性と女性の特徴—身体的特徴を除く—をリストアップする。）

3. 平等（7分）

（6つのグループで平等とは何かを話し合い、その後各グループから意見表明を求める。）

4. ポルノ（※6 8分）

（「ポルノとは何か?」「なぜ人はポルノを見るのか?」「ポルノから何が学べるか?」についてグループで討論し発表する。）

5. 同性愛、異性愛、トランスセクシュアル（9分）

（15の質問に対し、正しいと思う生徒は座ったままで、間違っていると思う生徒は立つ。）

⑤ 7学年女子グループ 11名（50分間）

1. 川のジレンマ（※3 19分）

2. 女の子のよい点、男の子のよい点（12分）

（各自に女の子と男の子の得意なことを3つ列挙させる。次に各自に女の子のよい点、男の子のよい点を1つずつ挙げさせる。その後7学年男子グループ2の回答を紹介する。）

3. 男の子と女の子の話題ベスト5をグループでリストアップする（※4 8分）

4. コンドームを装着した性交の過程について20枚のカードを正しい順序に並べる（※2 8分）

いずれのクラスにおいても、1単位時間の授業（35～60分間）が2種類～5種類の活動に区分されていた。それぞれの活動は人間のsexあるいはgenderの認識に関係するものであったが、1時間の中で扱う複数の活動の相互の連関は特に考慮されてはいないように思われた。

上記の中で複数のクラスで行われていた活動には、※印の後に同じ数字を付してある。この中には例えばコンドーム装着練習のように、7学年男子と9学年男子のクラスでともに行なわれたものもある。日本の学習指導要領に見られるような教育内容の学年指定に慣らされてきた筆者は、当初9学年男子クラスの生徒は7学年ですでにコンドーム装着練習を経験済みで今回2回目になるのかと勘違いしていた。しかし授業者のJenny Dufberg（教師）によるとそうではなく、9学年男子クラスの成熟度から見て最近になってようやくこの学習にふさわしい準備ができたと判断したとのことである。日本の学習指導要領でも最近では2学年の幅を持たせて、どちらで取り上げるかを学校現場の裁量に任せているケースもあるが、それは教師自身が生徒の成熟度を見極めて学習の時期を決めるという発想とは大きな距離がある。

授業者であるJennyとAgneta Lewerth（学校看護師）は、sex och samlevnadの全体プランを持っていたようである。報告者は彼女たちから何時間分かのシナリオをもらった。しかし、それをいつどのように用いるかは、先のコンドーム装着練習の例からわかるように、ケース・バイ・ケースである。Jennyは同じ性教育の内容を与えるときもケース・バイ・ケースで学年や時期を変更するのだ。各生徒の成熟度、レディネス、関心、性について学ぶ意欲を考慮することが重要なのだ。

II-2. 授業の2つのパターン

あくまでも参観した5つの授業の範囲でだが、合計19(重複を省くと12種類)の学習活動は、その形態から見て大きく次の2つに分類することができる。

II-2-1. 教師が知識や技術を伝達する活動

下記の4種類の活動が該当する。

- A. 7学年男子1の1、9学年男子の1(コンドーム装着)
- B. 7学年男子1の2、7学年男子2の4、7学年女子の4(性交の順序)
- C. 9学年男子の2の一部、9学年女子の1のごく一部(愛とセックス)
- D. 9学年女子の5(同性愛、異性愛、トランスセクシュアル)

但し、そのどれをとっても単調な講義形式で行なわれてはいなかった。

Aは実技練習であり、教師は生徒たちに繰り返しコンドーム装着を練習させながら、注意すべきこと等の情報を与えていった。

Bについても、教師が最初からその順序を教えるのではなく、生徒たちにわいわいがやがやと相談しながらカードを並べる作業をさせた後に、教師が正しい順序に並べ替えていった。

またDでは、全て正解がある15の質問に回答させるが、最初に全員が起立した上で、答えが正しいと思えば座り、間違っていると思えば立つ、という形で意思表示させており、行動を含むことでゲーム的なおもしろさが発揮される。質問の内容も年代とか言葉の定義を問うクイズ的なものであった。

Cの活動は、性行動に関する様々の質問に対して生徒が緑(はい)、赤(いいえ)、黄(わからない、もしくは言いたくない)のいずれかのカードを挙げて意思表示する活動であるが、9学年男子クラスでは9番目の質問の後で結婚前の性交についてJennyが、12番目の質問の後でHIV・エイズについてJennyが、21番目の質問の後で女子割礼についてAgnetaが説明している。9学年女子クラスでの同じ活動では、12番目の質問の後にHIV・エイズについてごく簡単に説明している。「愛とセックス」の26または25の質問群は、性行動に関する生徒の意識とか価値判断を問うもので、特定の正解があるわけではないのだが(例えばHIV・エイズに関する問いは、「私はHIV/エイズが心配だ。」という、個人の意識を問うものとなっている。)、生徒たちの回答とは別に教師がそれに関連して重要と考えることは伝えようとしている。

II-2-2. 生徒の意見表明の活動

下記の9種類の活動が該当する。

- E. 7学年男子2の1、7学年女子の1(川のジレンマ)
- F. 7学年男子2の2、9学年女子の2(男の子・女の子の特徴)
- G. 7学年男子2の3、7学年女子の3(男の子・女の子の話題)
- H. 7学年女子の2(女の子・男の子のよい点)
- I. 9学年男子の2の大部分、9学年女子の1の大部分(愛とセックス)
- J. 9学年男子の3、9学年女子の4(ポルノ)
- K. 9学年男子の4(アルコール)
- L. 9学年女子の3(平等)

Eは、ストーリー(川を隔てて恋人Henrikと離れているLisaは、川を渡してやる報酬に性的関係を要求する隣家のArneの要求に応じてしまい、Henrikに殴られる。他に3人の男女が登場する*2。)に

登場する男性3人と女性3人を悪いと思う方から順にランク付けする活動である。どちらのクラスでも最初に個人でランキングを決め、次にグループで話し合っただけでグループとしてのランキングを決めさせている。グループで価値判断を統一させていることがやや気になるが、教師はランキングに対してもその理由に対してもコメントしていない。性的関係、暴力、隣人関係などが絡んだ問題事態についてランキングという形で価値判断するという活動自体が重視されている。

F・G・Hは、生徒たちが日頃同性・異性をどのように意識しているかを自覚化させる活動である。7学年女子クラスでのG・Hでは、活動の後に教師は7学年男子クラス2での同じ活動の結果を発表している。しかしどちらのクラスでも、教師は「どう考えるべきか」についてのコメントは一切していない。

I・Kは、愛とセックスについて、及びアルコールについて、質問に対して生徒に3色のカードによって意思表示させる活動である。生徒の反応には興味深い点があるので次項で検討するが、各質問について時間をかけて討議が行なわれているわけではなく、一部で教師の説明がある以外は比較的淡々と進行している。そしてやはりそれぞれの問いへの答えについて教師によって正解が示されることはない。現実生活では、もし失敗すれば、あるいは判断を誤れば問題を生じる場合もあり得る性行動に関する問いであるが、「こうあるべきだ」という見解を教師が示すことはなかった。

K・Lは、教師が問いを投げかけ、グループで話し合っただけで結果を発表する形式である。これについても教師が見解を述べることはなかった。

これらの活動においては、生徒が意見を表明すること（そしておそらく、他者の意見を聞くことで自己の見解を問い直すこと）自体が最も重視されていると考えられる。

II-3. 性に関する生徒の意識

「愛とセックス」という活動において表明された生徒の性に対する意識を検討する。

II-3-1. 7学年男子・「黄」が多数の項目

7学年男子クラスでは、「黄」＝わからない、答えたくないという回答が多数である項目が多い。26項目中以下の9項目である。

3. 酔っている時はセックスすることは難しい。
4. 店や薬局でコンドームを買うことは恥ずかしい／恥ずかしいだろう。
6. 人は性交する時愛し合っていることが重要である。
7. 女の子は多くの場合に性行動に対して男の子がイニシアチブを取るだろうと期待する。
8. パートナーがセックスを求めている時にノーと言うことが難しい人はたくさんいる。
11. ポルノグラフィはセックスに対する人間の見方を傷つける。
16. 男の子は女の子と同じくらい感情が豊かだ。
18. 何度も性行動を行なう女の子は、悪い噂を立てられる危険がある。
24. ある状況においてはパートナーに対して決定してもよい。

このように、性行動における男女の関係のあり方を男性の側からどう見るかに関わる項目で、判断を保留する男子生徒が多かった。

*2 詳細なストーリーは、前出拙稿pp. 256-257に掲載。

Ⅱ－3－2．7学年男子・「緑」が多数の項目

「緑」＝肯定が多数であったのは、以下の4項目である。

1. 人は一人以上の人と同時に恋に落ちることができる。
21. 男の子は女の子より強い性的能力を持っている。
22. 恋を公然化する同性愛者は勇気がある。
23. 好きな人にノーと言うことは難しい。

Ⅱ－3－3．7学年男子・「赤」が多数の項目

「赤」＝否定が多数であったのは、以下の7項目である。

2. 両親がつきあっていることを認めてくれることが重要である。
5. マスターベーションについて話すことは「禁じられている」／タブーだ。
9. 人は結婚するまでセックスすることを待たねばならない。
12. 私はHIV／エイズが心配だ。
13. 性行動を行なうことを望まない男の子は変だ。
17. 男の子はしばしば浮気する。
19. 何度も性行動を行なう男の子は、悪い噂を立てられる危険がある。

Ⅱ－3－4．9学年女子・「黄」が多数の項目

一方、9学年女子クラスでは、「黄」＝わからない、答えたくないが多数だったのは以下の1項目のみである。

3. 酔っている時はセックスすることは難しい。

Ⅱ－3－5．9学年女子・「緑」が多数の項目

「緑」＝肯定が多数だったのは、以下の7項目である。

1. 人は一人以上の人と同時に恋に落ちることができる。
10. 同性の人たちの関係は男女の愛と同じくらい深く暖かいものになり得る。
16. 男の子は女の子より感情が豊かだ。
18. 何度も性行動を行なう女の子は、悪い噂を立てられる危険がある。
20. 恋している人がジェラシーを感じると嬉しい。
22. 恋を公然化する同性愛者は勇気がある。
23. ある状況においてはパートナーに対して決定してもよい。

Ⅱ－3－6．9学年女子・「赤」が多数の項目

「赤」＝否定が多数だったのは、以下の10項目である。

4. 店や薬局でコンドームを買うことは恥ずかしい／恥ずかしいだろう。
5. マスターベーションについて語ることは「禁じられている」／タブーだ。
8. パートナーがセックスを求めている時にノーと言うことが難しい人はたくさんいる。
9. 人は結婚するまでセックスすることを待たねばならない。
13. 性行動を行なうことを望まない男の子は変だ。
14. 性行動でイニシアチブを取るのは男の子だ。
17. 男の子はしばしば浮気する。

19. 何度も性行動を行なう男の子は、悪い噂を立てられる危険がある。
21. 男の子は女の子より強い性衝動を持っている。
24. 人が性行動を行ないたいと思っているのを見るのは恥ずかしい。

II-3-7. 7学年男子と9学年女子ともに多数意見である項目

ここからは上記データの二次的検討を行なう。

男女を比較してみると、共に多数意見であるのは、下線 で示した以下の8項目である。

1. 人は一人以上の人と同時に恋に落ちることができる。
3. 酔っている時はセックスすることは難しいかどうかは、わからない。
5. マスタベーションについて話すことは禁じられていないし、タブーではない。
9. 人は結婚するまでセックスすることを待たねばならないことはない。
13. 性行動を行なうことを望まない男の子は変だ、とは思わない。
17. 男の子はしばしば浮気するわけではない。
19. 何度も性行動を行なう男の子でも、悪い噂を立てられる危険はない。
22. 恋を公然化する同性愛者は勇気がある。

生徒たちは恋愛の自由、性行動の自由を主張する一方、性行動への欲求に個人差があることも認めていることがうかがえる。

II-3-8. 7学年男子では「緑」が多数意見、9学年女子では「赤」が多数意見の項目

男子が肯定多数、女子が否定多数と意見が分かれたのは、下線 で示した以下の2項目である。

21. 男の子は女の子より強い性的能力を持っている。
- 23/8. 好きな人にノーと言うことは難しい。

ここでは男子生徒の多くが性行動において男性が積極的行動をとって女性をリードすべしと信じているのに対し、女子生徒は男性に対して受け身に回ることを望んでいないという対照的結果が出ている。

II-3-9. 7学年男子では「黄」が多数意見、9学年女子では「緑」が多数意見の項目

男子では保留多数だったが女子で肯定多数であったのは、下線~~~~~で示した以下の3項目である。

16. 男の子は女の子と同じくらい感情が豊かだ。
18. 何度も性行動を行なう女の子は、悪い噂を立てられる危険がある。
- 24/23. ある状況においてはパートナーに対して決定してもよい。

男子生徒が自らの性の性的能力に自信を持っているにしては感情表現に対して自信を持っていないのに対し、女子生徒は男性の感情表現能力を評価している。また性的関係においてイニシアチブをとる意志も女子生徒の方が強く持っている。一方、女子生徒は女性の方が積極的性行動に対して不利な評価を与えられる可能性があることも自覚している。

II-3-10. 7学年男子では「黄」が多数意見、9学年女子では「赤」が多数意見の項目

男子では保留多数、女子では否定多数だったのは、下線~~~~~で示した以下の2項目である。

4. 店や薬局でコンドームを買うことは恥ずかしい／恥ずかしいだろう。
 - 7/14. 女の子は多くの場合に性行動に対して男の子がイニシアチブを取るだろうと期待する。
- 女子生徒は性行動における男性の一方的なイニシアチブを認めず、また避妊のための行動は恥ずかし

いものではないと考えている。

II-3-11. 意識調査分析のまとめ

このように見てくると、男子生徒の性意識に一方的な願望が表れているのに対し、女子生徒は性行動に対してより冷静で現実的な見方をしていることがうかがえて興味深い。

II-4. 教師が生徒の意見に対してコメントすることの意味

授業観察を終えて帰国後、Jenny に授業に関する質問をメールで送付し、回答を得た。質疑応答の内容は以下の通りである。

Q1：あなたはそれぞれの授業のはじめに生徒たちに対して、今日学習したことを他人にあるいは他の場所で話してはならないと言いました。その理由は、それぞれの子どもや学級にはあなたが教えたことを学ぶのにふさわしい時期があり、従って彼らが学ぶべき時期外にその事柄について情報を与えられるべきではないからですか？

A1：違います。理由は、集団の全ての生徒たちが話をするとき自由を感じるべきであり、自分が言ったことを誰も教室外で言いふらさないとわかっている必要があるからです。私たちはそれを 'tystnadsplikt' (守秘義務) と呼んでいます。あなたの国でも例えばもしあなたが病院に勤務していたら患者さんのことを友人に話してはいけなんでしょう。たいていあなたは話をしないという誓約書に署名するでしょう。生徒たちはもちろん授業のことを話してもいいのですが、ある人が何を発言したかは話してはいけなんでしょう。

Q2：生徒たちは教室に紙を残していき、あなたはそれをゴミ箱に捨てました。あなたはそれらの紙を学習の結果として保存しないのですか？日本の教師は生徒に学習に用いた紙に記名させて、授業の終わりにそれを回収します。放課後あるいは休み時間に、あるいは授業中に子どもたちがドリルをしているとき、教師は紙を読み、それぞれに短いコメントを書いて、後で一人一人に返します。あなたが生徒が使った紙を捨てることは 'tystnadsplikt' と関係がありますか？

A2：私たちは紙を保存しません。生徒たちは話をしますから、私たちはコメントを書く必要を感じません。私たちは sex och samlevnad において生徒の作品に評点をつけることはしません。何か言いたいことがある生徒もいれば、言いたくなかったり居心地が悪く感じている生徒もいるかもしれません。だから彼らの作品に評点をつけたりコメントをすることは公平ではありません。

Q3：「川のジレンマ」の授業記録において、私は「それぞれの順位を発言した生徒はその理由も述べたが、Jenny はそれらのコメントについては議論をしなかった。」とコメントしました。私自身あなたと生徒たちとの会話のいくつかの言葉しか聞き取れないのが残念なのですが、それでも「川のジレンマ」の3人の男性と3人の女性の順位については全く討論は行なわれなかったのがわかりました。おそらく生徒たちは順位(1位から6位まで)を評価する様々な観点を持っていると思います。しかし、生徒たちにとって6人の人たちの行動をどう評価するかについて意見を交換することはよいことだと思います。「川のジレンマ」の物語はとてもおもしろいと思いますが、クラス全体においてこのジレンマが扱われる過程についてはやや不満があります(小グループでの意見交換は行なわれていたし、それはよいことだと思います)。私の考えをどう思われますか？

A3：もちろん生徒がこの人たちをどう評価するかについて討論することはよいことだと思います。しかし、時には討論の結論が出ないこともあるし、それもまたおもしろいとは思いますが、私としてはあの時はそれよりも生徒にもっと別のもの、別の練習を体験させたかったし、時間は十分にはありませんでした。でもあなたの考えは正しいと思うし、生徒には常に討論をさせて、考え方を考える機会を与えなければなりません。だから私と Agneta のプランは決して最初に考えたとおりには進行しないのです。生徒たちは私たちが思う以上に討論したがついています。彼らはそれを本当に楽しんでいるし、なぜそのように考えるのかということを知りたいという要求を持っています。

Jenny との質疑応答から、sex och samlevnad の授業における自由な雰囲気がいかに重視されているかを知ることができた。Jenny の配慮は彼女が生徒たちに対して授業中の発言内容を授業外で話すことを禁じていることに表れている。これは全ての生徒が意見表明する際に自由であると感じることができるようである。

筆者の第2の質問に対しても Jenny は同じ理由を表明している。Jenny が生徒が書いた文章にコメントを加えない理由は、次の2点である。

- (1) Jenny は sex och samlevnad の学習において生徒に評点をつける必要はないと考えている。だからコメントは必要ない。
- (2) 全ての生徒が意見表明したわけではない。だから Jenny が一部の生徒にだけコメントすることは公平ではない。

第1の理由については、筆者はほぼ同意する。sex och samlevnad の諸問題はたいてい個人の価値観に結びついており、評価することは適切ではない。

しかし、生徒の発言や文章に対してコメントすることは、評価以外の意味も持っている。このことによって生徒がクラスメートの目の前で進んで自己表現をすることを励ますという意味である。また、教師が生徒の仲間として議論に参加するという意味も持っている。

第2の理由については、筆者は部分的に同意する。議論に積極的に参加する生徒がおり、消極的に参加する生徒、参加を拒否する生徒もいる。もしも教師が、授業への生徒の積極的、消極的、その他多様な態度を容認しているにもかかわらず、積極的生徒だけを評価しているように見られてしまったとしたら、それは生徒に目には不公平であると映るであろう。

しかし筆者は敢えて言いたいのだが、日本の学校において多くの教師たちは生徒の発言や文章に、特に普段消極的に見える生徒の言明に対するコメントは、激励という重要な機能を持つと確信している。

おそらくこれは教師の根本的機能に関連している。そしてもちろん sex och samlevnad 以外の領域では、教師の機能を他の側面から議論できるであろう。

III. Blackebergs gymnasium における sex och samlevnad の授業の分析

III-1. 授業の雰囲気と全体構成

授業冒頭のやりとりからわかるように、生徒たちにとって初めての sex och samlevnad の授業であった。彼らは全員外国からの移住者の子ども（男子）である。彼らの学年を聞き忘れたのだが、いずれにしても彼らは、高等学校生徒の年齢になるまで性教育を受けていない。

Magnus Silfverstolpe（この学校の副校長でこの授業の担当者）は、彼らが「16～18歳の子どもはいつもセックスのことばかり考えているのが普通だ。」と最初に述べて、性について語ることは自然なこ

とだという雰囲気を作っている。その後の授業でも、(時折教師らしく「シーッ!」と集中を求めたりする以外は)まるで生徒たちの年上の友人のようにフランクに性を語っている。

授業の構成は以下の通りであった。

- ①男性の外性器・内性器 (36分)
- ②女性の内性器 (8分)
- ③妊娠 (7分)
- ④性感染症 (4分)
- ⑤女性の外性器 (8分)
- ⑥処女膜をめぐる (10分)
- ⑦女子割礼 (4分)
- ⑧コンドームの安全性と使用方法 (8分)
- ⑨性志向と性行動のヴァリエーション (9分)
- ⑩その他の質問に答える (8分)

多くのスライドを用いながら、男女の体と性行動についての基礎的知識をきちんと伝えようとする授業であった。項目区分は授業者ではなく報告者がつけたものである。また、⑧以降は事前に生徒に提出させた質問に答える形で行なわれた。最初の男性性器に関する学習は2時間の授業の第1時の半分以上を費やしている。それ以降は4分～10分という短時間で区切って次の内容に進んでいる。

Ⅲ-2. ペニスについての学習

①の内容を詳しく見ると、陰茎の呼称→ペニスのサイズ→女性にとってはサイズは重要ではないこと→睾丸→精子・精液→前立腺→勃起のメカニズム→包茎・包茎手術→様々な形状のペニス→(ここから質疑応答) 射精の量・性交の頻度→マスターベーション(俗説の批判)、という展開であった。

この中で、例えば冒頭の陰茎をどういう言葉で呼ぶかを取り上げた部分では、生徒たちが様々な言語圏から来ていること、それぞれの言語に男性性器の様々な呼称があることを確認している。そうして関心を惹起しながら、外性器・内性器のスウェーデン語での正しい呼称とその機能の学習へと展開していく。

ペニスのサイズの学習で感心させられたのはその数値の出し方である。勃起状態において、「95%が9～22cm、75%が12～18cmで、平均が13cm」とMagnusは述べている。平均値だけであったり、75%が含まれる数値だけであったら、「自分は小さすぎるのではないか」と心配する生徒であっても、「9cm～」という数値を示されるとやや安心するかもしれない。ペニスの長さを、倍以上の開きがある個人差の大きいものとして提示している。さらにペニスのサイズは手、鼻、口などと同じく個人差があるものであること、また性交において、女性から見れば男性のペニスの大きさは重要な問題ではないのだということを強調している。ポルノグラフィーなどの影響で、男子生徒の中には大きなペニスこそが旺盛な性的能力の表れであって女性を喜ばせるものであるという信仰があると思われ、Magnusはそれを否定しているのである。

Ⅲ-3. 生徒の性認識のバイアスへの問題提起

生徒の発言を通訳の土屋哲志氏、大橋紀子氏の協力を得て可能な限り再現してみた。その中には以下のように、おそらくは彼らが育ってきた社会とその文化、また不正確な、あるいは誤った俗説などに規定された性認識の歪みが反映していると思われる発言があった。生徒の発言(授業記録~~~~部分)とそれへのMagnusの対応(同~~~~部分)を列挙する。

- ・①で男性の避妊（パイプカット）についての学習の中で、「女性を手術した方がいいんじゃない？」という発言があり、笑いが起こった。
→男性の手術は簡単であることを説明。
- ・①でペニスの形の個人差についての学習の中で、「セックスをするときに好きにしてって女性が言うよ。」の発言。
→女性のワギナに弾力性があってペニスの大小に対応できることを説明。
- ・②で「80%の女性がワギナに感染していると聞いたことがある。」と発言。
→それは正しくない、バクテリアが中に入ることはあるが、と説明。
- ・④のクラミジアについての学習の中で、「感染したら臭い嗅げばわかるじゃない。」と発言。
→無臭の場合もあるからわからない、と説明。
- ・⑥で「それじゃ、処女テストをやったとすると？」と発言。
→大人の女性がセックスをしたという診断は医師にもできない、と説明。

これらの生徒の発言の多くに、性行動において男性を主、女性を従と見なす価値観が滲み出ている。性交の時女性は男性の言いなり、避妊は女性の役割、女性から性病をうつされることは怖い、自然に気づけるのではないかという身勝手な解釈、相手が処女かどうかはチェックできる、など、男性中心のセックス観である。

これに対して Magnus は、「そうした価値観は誤りだ」という対応は一度もしていない。すべて事実を対置して、生徒の事実認識の誤りを指摘しているのである。

III-4. 性文化の違いへの対応

Magnus は⑥で、処女膜が破れて出血することによりその女性がそれまで性交未経験であったと証明できるという俗説が不正確であることを説明しているが、その中で以下のように述べている。

「あなた方の国では、結婚して最初にセックスした時にまず最初に敷布を見て、もし血が出ないと殺してしまった。なぜかというと、出血しないのは前にセックスしたことがあると考えたから。しかしそんなことはない。そんな検査をすることはできないんだ。これは非常に重要なことだけど、そういう検査はないんだよ。」

ある社会の性文化では、女性の純血＝結婚まで性交未経験であることが絶対必要であるとされ、その規範を破った女性は命まで奪われる。Magnus は「あなた方の国」と言っているのも、生徒たちやその親の出身国の話であろう。Magnus はこうした性規範に批判的であるが、生徒たちがそのような性規範の中で成長したということ自体は尊重しようとしていると思われる。規範自体を「誤りだ」と決めつけるのではなく、「そもそも処女の判定などできないのだ」と事実に基づいて反論し、そうした性規範が成立しないことを理解させようとしている。

また⑦で、女子割礼について以下のように説明している。

「これは…前に包茎手術の問題を言ったけど、思い出してくれたかな？同じようなことを女性にやる場合があります。スウェーデンではそれは禁止されてるよ。これは性器削除。特にアフリカの多くの国、ソマリア、ガンビア、スーダン、エチオピア、エルトリア、エジプトではこれは普通です。どうやる？小さいときにクリトリスを取っちゃって、まわりの陰唇を取っちゃって、それで縫い合わせて、一つの穴しか残さない。ペンみたいな小さい穴にしちゃうんだ。こういう状態になった女性にたくさん会ったことがあります。これは非常に苦痛です。多くの女の子がこういう手術を受けている。しかし、セックスするとき小さすぎてペニスが入らない。切るまたは裂かないといけない。子どもを作るときも裂かないきゃいけない。穴が小さいとおしっこがよく出ないし、メンスの時には出血できなくなったためにそれ

が溜まって腐る場合がある。

そしてこういう手術をした女の子たちは非常にたくさんの大きな問題を抱えています。だからこそスウェーデンでは禁止されている。多くのアフリカの国でも禁止するところが増えているけれども、スウェーデンに住んでいて、そして母国に帰って、例えばソマリアでそういう手術をしてスウェーデンに帰ってきた場合、それでもスウェーデンでは刑務所に入ります。これは、その女の子を破壊してしまうからです。両親がやるんだけれども、だからといって彼らが必ずしも悪い親であるとは言えない。伝統に沿っただけで、子どもにとっていいと思っているから、それが非常に危険であることを両親に知らせなければなりません。女性に大きな障害を与えているのです。スウェーデンではだめだ。女の子はセックスをする時に問題が起こります。奥さんがいたりガールフレンドがいたら、セックスは気持ちよくなきゃいけないでしょう？ だけど、このような女の子達はセックスをしたがらない。この子達をスウェーデンでは病院につれていって、そこで開ける手術をして、クリトリスは元に戻せないけれども、ヴァギナを作ってセックスが気持ちよくできるようにし、子どもも産めるようにします。だけど、本当のクリトリスがある方がはるかに気持ちがいい。これが女性性器切除です。」

女子割礼については、それがいかに女性の sexuality、sexual identity を傷つけるものであるかを強調している。そしてそのような切除手術がスウェーデンでは禁止されていること、他国からスウェーデンへの移民が一時的に母国に帰国して切除手術をした場合もスウェーデンでは罪に問われることを説明している。スウェーデンに居住する移民はスウェーデンにおける性規範と法に従わなければならないと説明しているのである。女子割礼がアフリカ諸国でも禁止されつつあることには言及しているが、生徒たちの母国の性文化を直接的に否定することはしていない。親たちは伝統に従っただけであると理解を示している。

Magnus の授業は全体として、性に関する正しい知識を与えながら、生徒たちに男性優位の性規範の見直しを迫るものになっているが、授業で価値判断に決着をつけようとはしておらず、あくまで生徒の主眼的な思考・判断に期待しているのではないかと思われる。

IV. まとめと今後の研究の展開に向けて

IV-1. 実践事例の一般化の困難さ

スウェーデンの sex och samlevnad の授業を分析することには、以下の点で難しさがある。

スウェーデンの学校カリキュラムは 1994 年以降に大綱化されたため、各学校は sex och samlevnad の教育について様々なプランを持っている。Dalarö skola の Jenny と Agneta は性教育の熱心な実践者であるが、同校の他の教師が性教育についてどういう考えを持ち、どう行動しているか、また他校の教師はどうかについては、まだ調べられていない。従って例えば、スウェーデンの教師は一般的に本物のコンドームとリアルなペニスのモデルを使用してコンドームの使い方を教えている、と述べることはできない。これは Jenny と Agneta の例であって、Jenny の実践が国家基準だと述べる根拠はない。

(ちなみに同様の一般化の困難さは日本についても言える。筆者は Jenny たちのようにリアルなモデルを使ったコンドーム装着練習は日本の学校ではあり得ないだろうと思っていたが、帰国後にこの実践を学生に紹介したところ、学校の授業でバナナなどを用いてのコンドーム装着練習を経験したことがあるという学生がいた。)

Jenny によると、Dalarö skola では 7 学年から 9 学年までの生徒に年間 20 時間の sex och samlevnad の授業を行なっているけれども、一方で年間 1 時間しか行っていない学校もあるという。スウェーデンでは 1955 年以来性教育は必修であるから、ゼロ時間は許されないが、各学校間には明らかに温度差がある。

また、Blackebergs gymnasium の Magnus の授業では教師の性についての自然でフランクな語りかけに驚かされたが、これについても、授業記録作成に協力された通訳・大橋紀子氏によると、「これはあくまでも特別に進んだ事例だ。」とのことである。

スウェーデンにおける性教育実践の実態把握を一般化可能なレベルまで進めるためにはより多くの（進んだものもそうでないものも）事例収集が必要になるが、日本からの参観者を受け入れ、ビデオカメラによる記録を承認し、インタビューにも応じてくれるのは、スウェーデン性教育協会のなどとも関わりが深い熱心な実践者ということになる。だから今後継続していく実践事例検討においては、「授業の平均的レベル」を見極めようとするのではなく、先進事例の中の多様性を探っていくことになるだろう。

IV-2. sex och samlevnad の授業中における羞恥の感情

性教育の授業分析においては、学習者の学習内容に対する認識の進化発展を分析することと同時に、授業過程において彼らの感情がどのように動いているかを知ることが、他の教科領域にも増して必要であると考える。

筆者自身は授業中のスウェーデン語での会話の個々の語彙や文章をキャッチできるわけではないので、学習中の生徒のデリケートな感情を知ることはできない。しかしこのことは、授業中における学習内容の理解のみならず、彼らの日常生活に対する sex och samlevnad の影響や意味を考察する上で重要である。中でも筆者は、生徒が教室で性的な事柄に対面するときに感じる羞恥心に関心がある。

Dalarö skolaでの7学年男子グループと9学年男子グループのコンドーム装着練習において、時々照れたような笑い声が聞こえた。彼らの心の中を流れる感情を正確に知ることはできないが、推測を試みる。

彼らは13～15歳である。スウェーデンでは15歳以下では性交は原則として許されないが、報告者が観察したクラスにもすでに性交を経験している生徒がいるかもしれない。また未経験の生徒もいるかもしれない。しかしそれらは private な事柄である。実生活の中では、少年たちがいっしょに座ってそれぞれのペニスにコンドームを装着することなどあり得ないだろう。それは日常生活では不可能な活動だし、従ってそのような恥ずかしい状況も起こりようがない。だから教室での装着練習が照れくさくて笑った生徒もいたのであろう。筆者と通訳の大橋氏が参観していたことも恥ずかしさの理由であるかもしれない。しかし、彼らがどの程度恥ずかしがっていたのか、あるいは授業中に恥ずかしさを感じる状況に対してどの程度当惑していたかはわからない。

例えば、その程度とは、公衆の面前でスピーチするのと同じくらいの恥ずかしさなのか？

あるいは、誰にも顔を見られたくないくらいの恥ずかしさなのか？

それとも、裸体を見られるくらいの恥ずかしさなのか？

日本では子どもたちの逡巡や羞恥心が性教育推進にとって障壁となっている。それは生徒が人間のセクシュアリティについて学ぶ際の否定的要因となっている。しかし一方で、性的な事柄への羞恥心は自然な感情でもある。だからそれを否定することは正しい指導方法ではない。

それでは我々は羞恥心をどう扱えばいいのか？

スウェーデンの生徒と日本の生徒の性的な事柄に対する羞恥心の内容や特徴は同じなのか？違うのか？

これらの点を今後さらに検討していきたい。

謝辞

Dalarö skola および Blackebergs gymnasium における授業参観、授業記録作成の際に多大なご協力をいただいた通訳者の大橋紀子氏、土屋哲志氏に心よりお礼申し上げます。